



大阪公立大学共同出版会

No.41

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

・特別寄稿 無機材料と出版	辰巳砂 昌弘	1	・自著を語る(33) キリスト教という現象	花岡 永子	5
・第15回 OMUP 総会報告	中村 治	2	・第37回 OMUPサロンのご報告		6
・自著を語る(31) しなやかにしたたかにシステム思考 / 大学の誇りと課題を全員広報	辻 洋	3	・新刊書の紹介		6
・自著を語る(32) 獣医学の狩人たち2	大竹 修	3	・大阪公立大学共同出版会事務局より／編集後記		6

特別寄稿

無機材料と出版

大阪府立大学学長 辰巳砂昌弘



昨年4月1日付で大阪府立大学学長に就任しました辰巳砂（たつみさご）昌弘と申します。どうぞ宜しくお願ひいたします。今年に入って、新型コロナウイルスが猛威を振るい、緊急事態宣言発出でステイホームが叫ばれていた期間に、拙文ではございますが寄稿

させて頂きました。このニュースレターを皆さまが読まれる頃には、「新しい生活様式」にも慣れ、平穏な日常を取り戻しておられることを期待しています。

私の専門は、化学、その中でも無機材料化学で、研究は、ガラス材料、それを用いた全固体電池の構築といったところです。「出版」との関わりは、やはり学術論文の執筆が最も多いです。外に向けては「学術研究の進展」のため、自分に向けては「生きた証を残す」ため、これまで40年以上論文執筆を続けてきました。著書は70編ほど発表していますが、分担執筆の専門書ばかりです。何年かに一度出版社から、大学生向けの教科書の執筆と編集を頼まれることがあり、現在「無機材料科学」という新しい教科書を十数人の全国の研究者の方々と製作しているところです。コロナ禍によるこれまでになかった自宅勤務日を利用して、学長業務の合間に、教科書原稿の編集作業等をさせて頂いています。

この無機材料科学の教科書の冒頭は、「人類は有史以前からずっと、より便利に暮らすことを追求し続け、知恵を絞ってきた。石器時代、青銅器時代、鉄器時代と、その時々に使いこなすことができるようになった道具の材質、すなわち「材料」が歴史の区分を表していることは興味深い。現代はまだ「鉄」の時代かもしれないし、「シリコン」の時代、あるいは「炭素」の時代かもしれない。いずれにしても、人類の文化の発展が材料の進化に大きく関わり、そのイノベーションが新しい人類文化を生み出していることにつながっている。」と始まります。要は材料の革新には世の中を変える力があるということを言いたいわけです。身近な例では、飲料を入れる容器に使う材料、私が子供の頃は、ほぼガラス瓶しかありませんでしたが、その後、スチール缶（鉄）、アルミ缶（アルミニウム）、紙パック、ペットボトル（ポリエチレン）などが登場して競い合っています。製鉄会社に勤める人は、アルミ缶よりスチール缶を愛飲する、私はガラス材料を研究しているので缶ビールより瓶ビールを好む、それはともかく、それぞれの材料が特有のメリットを持っているので、簡単にひとつの材料が他を駆逐してしまうことはないと考えられます。かつて、自動車に使われる金属製のエンジンがセラミックエンジンに置き換わるとか、リアウインドウが透明プラスチックに置き換わるという話がありました。それほど簡単には実現していません。もちろん、材料の問題は持続可能な世界を実現するための環境問題とも深く関わっています。

私の研究対象はガラスですが、ガラスの一般的な特徴は透明なことや電気絶縁体であることです。それゆえガラス材料は窓ガラスや光ファイバーなどに使われます。そのような中で、私はガラス材料を、透明や電気絶縁とは無縁の

電池材料として使い、電動車両用の全固体電池の実用化を目指しています。しかし、もしこの新型電池が実現したとしても、これまでのリチウムイオン電池が簡単になくなることはないと思っています。

出版の世界では、電子書籍が台頭し、先に述べた学術論文を掲載する学術雑誌では電子ジャーナルが主流になりました。紙媒体の書籍はどうなるのでしょうか。私は、紙でできた本が特有のメリットをもっている以上、簡単には衰退しないと思っています。特に専門書、貴重なものほど紙

媒体の重要性は増していくのではないかでしょうか。

大阪公立大学共同出版会には、本学や大阪市立大学の研究者に、専門書を出版しやすい環境を提供頂いています。大変有り難い存在と感謝しています。公立大学法人大阪が発足し、新大学のスタートが1年半後に予定されている今、統合に向かう両大学の教員が一丸となって協力していくことが必要です。本出版会には、その魁としての存在感を今まで以上に示して頂きたいと願っています。

第15回OMUP 総会報告

令和2年7月31日（金）午前11時から正午まで大阪府立大学B14号棟2階会議室において、第15回NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）の総会が開催された。総会成立の確認後、八木孝司理事長を議長に選出し、さらに上田純一常務理事と中村治常務理事を議事録署名人に指名して、議事に入った。第1号議案「令和元年度事業報告」では、図書の刊行にあたり、著者、編集者、編集長、事務局および印刷所における一連の作業がより効率的に行われるようになるとともに、著者とのトラブルを避け、より正確に作業を行うことを目的として、「出版依頼受付から納品までの基本的フロー」を同年度に作成し、そのマニュアルに従って各作業を実施していること、責任編集作業強化のため、金井一弘編集長を中心として編集者出席のもと編集会議を開催し、新刊図書の出来映え、問題点改善等について意見交換を行っていることなどが報告され、満場一致で承認された。第2号議案「令和元年度事業決算」は、表に示す通りである。監事より「適法かつ正確である」と署名捺印をいただいていることが報告され、満場一致で承認された。第3号議案「役員等の選任」では、八木孝司理事長、上田純一常務理事、大塚耕司常務理事、金井一弘常務理事、山東功常務理事、内藤裕義常務理事、中井孝章常務理事、中村治常務理事、生田英輔監事、上野山達哉監事をそれぞれの職に選任し、その任期を令和4年（2022年）8月7日までとすることが提案され、満場一致で承認された。第4号議案「業務契約」では、杉本公認会計士事務所との顧問契約、ホームページの維持・管理契約、責任編集業務の委託契約継続のほか、事務局業務に関して児玉倫子氏との契約の継続に加え、湯井順子と契約を新規に結ぶことが提案され、満場一致で承認された。第5号議案「令和2年度事業計画」では、受託出版事業、出版物の受託販売事業、OMUPブックフェアの開催、出版目録の作製と配布、ニュースレターの発行（年間2回）、「読ん得本々」の発行、ホームページの運営、OMUPサロンの開催など、おおむね前年度と同様の事業を展開することが提案され、満場一致で承認された。第6号議案「令和2年度事業予算」では、表に示すような予算が提案され、満場一致で承認された。（文責：中村治）

令和元年度事業決算および令和2年度事業予算書

合計	(単位:円)	
科 目	R1 決算額	R2 予算額
事業収入		
書籍売上	6,509,842	6,600,000
出版収入 著者負担	7,053,637	7,150,000
〃 大学負担・出版助成等	2,210,157	2,700,000
寄付金収入	3,000	0
入会金収入	90,000	100,000
その他の収入		
受取利息	58	40
雑収入	60,525	10,000
当期収入合計	15,927,219	16,560,040
売上原価		
期首商品棚卸	1,161,071	1,433,607
製作費	6,901,182	7,000,000
運送・発送費	323,486	300,000
編集デザイン料	1,107,314	1,280,000
期末商品棚卸	-1,433,607	-1,400,000
管理費		
雑給	3,389,866	3,600,000
賞与	330,000	0
福利厚生費	319,384	410,000
業務委託費	463,637	470,000
旅費交通費	567,846	500,000
通信費	110,066	110,000
交際費	6,139	10,000
会議費	20,739	20,000
地代家賃	75,446	80,000
水道光熱費	31,801	32,000
著者精算	2,030,156	2,000,000
消耗品費	23,580	23,000
事務用品費	136,932	280,000
租税公課	800	800
広告宣伝	24,142	20,000
支払手数料	318,140	300,000
雜費	9,000	10,000
法人税等	70,008	70,000
当期支出合計	15,987,128	16,549,407
当期収支差額	-59,909	10,633
前期繰越収支差額	6,348,273	6,288,364
次期繰越収支差額	6,288,364	6,298,997

自著を語る（31）



しなやかにしたたかにシステム思考

A5判、上製本、124頁 1,000円+税

ISBN978-4-909933-03-4 C0037

大学の誇りと課題を全員広報

A5判、上製本、248頁 2,000円+税

ISBN978-4-909933-07-2 C0037

辻 洋 著

2019年3月、4年間に渡った大阪府立大学の学長の任を終え、休日の勤務がほぼなくなり、かなり自由な時間を得るようになった。在任中から、退任したときには「退職金を使って、教育・研究者として生きた証を何か著書としてまとめたい」と思い続けていた。特に、自分の研究の記録を単著として一冊と、米国人研究者に誘われて英文で共著の一冊は、すぐ執筆にかかるよう目次案を作り、図表や参考文献など材料を整理していた。

ところが在任中に比べて時間がとれるようになったが、いざ書こうとするとなかなか筆が進まない。書くことが好きだったのでなぜか進まない。そこで、まずネタとなる原稿のあるものから始めることにした。これが今回の2冊である。

一冊は、入学式と学位記授与式で読んだ式辞だ。それぞれ4回あったので、計8章できる。それに年頭の辞や年度初めの挨拶を加えて構成した。秋の入学式の式辞は、留学生が多かったため英語で行っていたのでそれも入れた。大学広報の職員が撮影してくれた写真も多く入れた。学生時代の恩師が「これからシステムはしなやかにしたたかにだ」という話をよくされており、それが自分の人生観・研究観・教育観にもなったのでタイトルとした。

もう一冊は、大学の動きを広報するために書き続けたSNSの記事だ。就任一年目の途中から毎日書き続けたのでかなりの量がある。教職員や学生の活動を「誇り」として書いたものもあれば、厳しい大学運営の「課題」として書いたものもある。記録として価値があまりないものを除き大半の記事を日付順に

並べた原稿を大学のレポジトリに登録し、著書では精選した記事を12分類にした上で、分類ごとに日付順に並べることとした。原則一つの記事に一枚の写真を添えた。大阪府立大学の規模の大学になると、多くの教職員や学生にとって、自分の大学で何が起こっているかもなかなかわからない。私自身もわからなかった一人だ。そこで大学の構成員が自分の立場から大学での出来事をアンテナとして発信することを求め「全員広報宣言」を出していた。二冊目のタイトルには、これを使った。

次にこの2冊をどこから出版するかを検討した。学術図書ではないが、大学運営に関する事であるので恐る恐るOMUPに相談してみた。すると足立泰二理事長（当時）がわざわざ学長室までお越し下さり、丁寧に出版会の制度を説明いただくとともに、出版を受けていただけるということになった。しっかりとしたエディターの方をつけていただき、希望通りの体裁と期日で仕上げることができた。感謝している。

私は、教授を退いたときに名誉教授の称号をいただいたが同時に学長に就任し、その学長退任後も公立大学法人大阪で勤務することになったので、区切りとする最終講義の機会を作るのが難しかった。このことを知った元同僚たちが、その代わりに講演会とパーティーからなる「出版記念会」を企画してくれた。講演会のタイトルは「しなやかにしたたかにシステム思考：システムの研究・開発・教育に携わって40年」。妻ともども参加し、多くの方々から温かいねぎらいの言葉を頂戴し、終生の思い出になった。

自著を語る（32）



獣医学の狩人たち2 20世紀の獣医偉人列伝

大竹 修 著

明治期に勃興した近代獣医学は、医学水準に追いつくことを目標に、勉学や

A5判、並製本、388頁 2,200円+税

ISBN978-4-909933-15-7 C0023

西洋留学を重ねることによって、世界の獣医学を知り、発展の中において、ノーベル賞や文化勲章に匹敵する、世界的

な偉業を達成した獣医学者を多数輩出するまでに成長した。

しかしその貢献度は、ひとり獣医学界の中だけの功績に甘んじ、広く社会にアピールされてこなかった現実が、淋しくもあり、悔しくもあった。

「歳月人を待たず」今のうちに、獣医学界における先達の偉業や、生き様を書き残しておかなければ、明日の日に、その名は忘れ去られ、功績は埋もれてしまうのではなかろうか。

立派な業績を残した医学者を顕彰する偉人伝が、書店の棚を飾り、多くの人に愛読されている。しかし獣医学者に関する偉人伝は見当たらない。

いつか誰かが、その期待に応えてくれる日が来るであろうとの、夢のまた夢を夢見ていた私の想いは、いつまで待っても現実のものとはならなかった。

募ってくる不安と焦りの気持ちの中で、「いまやらねばいつできる。わしがやらねばだれがやる」の巨匠、平櫛田中翁の言葉が脳裏に浮かび上がった。

その瞬間から、あたかも偉人伝作りが自分の晩年に課せられた義務であるかのような錯覚に陥り、気が付いた時には、無謀にも大洋に小舟を漕ぎ出してしまっていた。

史料収集に難渋しながら、初めてまとめた28名の偉人列伝は、1万字を基本として、各位の偉業や、それを成し遂げるまでの艱難辛苦、情熱、責任感、忍耐力などはもとより、へえー!?と驚くような傑作な人物像や、思わず笑ってしまいそうなエピソードなども紹介し、数点の古い写真を添付するという体裁とした。

幸いにも、浜名克己鹿児島大学名誉教授の、親身になった励ましと指導のおかげで、「獣医学の狩人たち・20世紀の獣医偉人列伝」として、2017年5月に出版され、1年後にOMUPから「ほぼ完売です」との連絡をいただいた。

読者の中には、獣医師でない一般の人々も少なからずおられたが、専門的な部分はわからなくても、それぞれの獣医学者の生き様が深い感動を与えたようであり、著者として安堵した。

しかし手元には、入手史料不足のために、やむなく途中でペンを折った未完成作品が数編残っていた。

これらを没にしてしまうことなく、いつの日にか必ず完成させて世に出したいという熱意が、かすかな残り火のようにくすぶっていた。

そこでもう一度、息を吹きかけて燃え立たせてみようと、再びペンをとってから3年が経過し、新たに20名の偉人伝を作り、続編の「獣医学の狩人たち2」として出版することができた。

今回、関連史料を依頼した先生方からは、快諾を得られたことが多く、その間に、2~3の大学教授からも「是非〇〇先生の評伝を書いてほしい」との依頼や協力があったからこそその完成である。

本書に描かれている偉人は、第二次世界大戦後の未曾有の

不況の中でも、飽くことのない探究心と、旺盛な好奇心で、信念をもって熱く生きた人々である。ざっと説明すると、空襲で灰燼と化した学園を見事に復興させ、「麻布大学中興の祖」と敬愛された偉人の努力と学園愛。埋もれていた業績が、民衆の熱意で掘り起こされ、郷土の偉人として顕彰された学者の数奇な人生。獣医学界の業績を、歴史として後世に残す史学会を設立した偉人。反芻家畜の代謝栄養障害であるケトーシスを日本で初めて発見した、ルミノロジーの提唱者。史上最大の伝染病「牛疫」の生ワクチンを開発し、苦難の末、根絶に導いた立役者。南極観測隊に従事して、吹雪と氷の大地で活躍した樺太犬たちの、事前の健康管理に一身を投げ打った臨床科学者の苦惱と動物愛。日本の畜産繁栄に必要な獣医学部創設に、情熱をぶつけた偉人。乳牛の宿命病である乳房炎の研究に貢献し、“ミスター乳房炎”と尊敬された偉人。各種食中毒菌の多彩な研究により、公衆衛生に多大な貢献をした偉人。家畜人工授精や胚移植技術を世界に先駆けて普及させ、畜産の繁栄に貢献した偉人。野生動物探索や絶滅危惧種の保護に努力した、ニホンオオカミやイリオモテヤマネコ研究の第一人者。家畜に発生した原因不明の奇病や、風土病の本態解明に努力した偉人。などの偉業や生き様を、平易な文章で紹介しているので、一般読者にも十分に理解していただけると自負している。

人は誰でも毎日のようにいろんな現象に遭遇し、あるいは何がしかの思いが突然に閃くことがある。しかし問題意識を持たない者には、それらの女神の微笑みは、ただ春の夜の夢の如く、うたかた(泡)としてむなしく消え去るのみである。

一大発見や偉業をなし、偉人として尊敬される人たちに共通することは、セレンディピティ（幸運の女神はよく準備された心にのみ微笑む）を大切にした人々である。

これらの偉人が残した各語録の一部も紹介しているが、その中の一語、「医学界で利用している技術や器具は、獣医学界でも応用できるというのは逆で、獣医学界で標準化していることを、医学界が応用するというのが本来である」は、けだし名言である。

前作では、掲載人物の顔写真を表紙に紹介したこと、専門用語に対する、用語解説欄を巻末に設けた事が好評を博した。

そこで本書でもこの形式を踏襲するとともに、本文の前に数行の、簡単な掲載人物紹介の一覧を設けたので、読者はまずこれを読み、興味のある偉人から優先して読む指標にしていただければ幸甚である。

本書を手に取った獣医畜産関係者および学生には、日本獣医学史の一環として認識していただくことを期待する。

さらに一般の読者には、獣医師は「動物のお医者さん」だけでなく、職種・職域の広さとともに、獣医学分野の研究が、人類の健康と平和に大きく貢献していることを、知っていたいただく機会になるのではなかろうか。

自著を語る（33）



諸宗教の世界における一世界宗教 キリスト教という現象

ハンス・ヴァルデンフェルス 著 B6変型判、並製本、228頁 2,000円+税
花岡永子・吉水淳子 共訳 ISBN978-4-909933-06-5 C3014

ドイツのハノーファー大学から、今は亡き夫と帰国（1973年）後は、ハノーファー大学・博士候補生コースの指導教授（Helmut Thielicke・1908-1986）編の『神を問う』や当時議論の的であったブルトマンの『神学論文集』の何冊かの翻訳に励んでいました。しかし、間もなく夫が癌で他界した後は、学生時代の指導教授であった西谷啓治先生（1900-1990）から、翻訳ばかりしている筆者が学問研究不足になるのではとお思いになった為か、「もう翻訳はしないように！」とのご助言を頂いたのです。しかしながら、それから数年経った頃に、西谷先生から、ハンス・ヴァルデンフェルス先生（以下、W.先生と略記）著の“Absolutes Nichts”（『絶対無』）の後半の翻訳のお誘いを頂きました。「翻訳はしないようにと言ったのに、申しわけないが」と笑いながらのお言葉がありました。

W.先生のご著書の後半部分の翻訳を通して、筆者は初めて仏教での修行に励むことができました。そして、『西田幾多郎全集』の難しい日本語よりは、カトリックの神父様で、ボン大学・神学部教授のW.先生のドイツ語による仏教思想の方が遥かに理解し易いものでした。

そんなわけで、数年前にW.先生から本書の日本訳へのお誘いを頂いた時には、禅に生きるキリスト者となっていた筆者は、諸宗教も学べる喜びでお引き受けしました。諸般の事情で出版が大変遅れましたが、大阪府立大学総合科学研究院修了者で、その後医薬翻訳者となられた吉水淳子様に本書の後半の翻訳をご担当頂きました。更に、大阪公立大学共同出版会の編集担当の川上直子様の良きご協力もいただいて、この翻訳書は出来上りました。

本書の著者W.先生は、三世界宗教の一つであるキリスト教とその根であるユダヤ教、もう一つの世界宗教であるイスラム教の研究に専念され、さらにもう一つの世界宗教の仏教の研究のために、日本での諸大学や、特に京都大学で研究をされ、幾度か訪日を繰り返されました。

本書では、副題にもなっていますように、先ずキリスト教は絶対視されてはいはず、キリスト教と仏教との対話が重視されています。その上、キリスト教の今日的課題は、自

らの今日立つ場所が、多元論的で多様な形式を纏う利益社会（Gemeinschaftに対するGesellschaft）において、次のような対立的二極的思考法の「間」に見出ことと考えられています。つまり、世俗性と競合する諸宗教との間に、保守主義と進歩主義との間に、無関心と融合主義との間に。そのためには、キリスト教は今日の諸宗教の協奏曲の中で自らを理解しなければならないと助言されています。

その場合、W.先生においては、仏教の研究が重要な役割を果たしています。W.先生においては先に述べたH. Waldenfels著『絶対無』（Absolutes Nichts, Herder, Freiburg, 1976.邦訳：松山康国・花岡永子共訳、法藏館、1986年）で明らかのように、西田哲学の「絶対無の哲学」や西田哲学の「空の哲学」が理解された上で、「キリスト教の神」と「仏教の空」との比較が大きな役割を果たしています。西田哲学においては、神と絶対無とは同一視されていますが、W.先生は、根本的にはそれに同意されながらも、カトリック信者としての信仰から、現代における新しい両宗教の接点を探究しようとされています。西田哲学における、新約聖書「フィリピの信徒への手紙」2章5-8節の「キリストは…自らを無にして僕（しもべ）の形をとり…、人間の姿で現れた」という神の子イエスの自己空化での神と空との同一性にも、W.先生は根源的には賛同されながらも、キリスト者として、キリスト教と仏教との接点を新しく見出そうと模索されています。筆者自身においては、京都の相国寺での修行の後は、仏教思想が哲学へと換骨奪胎された「絶対無」と「キリスト教の神」とは同定され得、また「空」と「神」とは同定され得ています。しかし、この思考法や生き方は、W.先生の著書『絶対無』や『キリスト教という現象』を通して初めて可能でした。その意味でも、キリスト教と仏教との対話は、生存する限り、あらゆる機会に続けられて行かねばならないと考えています。

第37回 OMUP サロンのご報告

第37回 OMUP サロンが、2020年2月12日(水)(18時半～20時半)、まちライブラリー@大阪府立大学(I-siteなんば3階)で開催されました(第60回アカデミックカフェとの共催)。演者は、OMUPが発行した『あのころの阿倍野』『洛北上高野山端』などの著者であり、常務理事でもある中村治教授(大阪府立大学人間社会システム科学研究科)。八木孝司 OMUP理事長のあいさつの後、中村先生の講演が始まりました。

テーマは「小学校卒業写真で見る服装・風俗の変化」でした。明治後期から昭和30年ごろまでの主に京都と大阪の小学校卒業写真を時系列にならべ、そこに写された児童や教員、保護者の服装などから、その背景にあるものをご説明いただきました。小学校や中学校の入学写真でなく小学校卒業写真はその時の流行やその時代背景、またその土地柄が一番色濃く出るとのこと。男児

は着物、学生服、セーター、国民服へ、女児は着物、袴、洋服、モンペへ変化しています。髪型やとるポーズからその時代を垣間見ることでき、大変興味深いお話を



した。このようにいろいろなことがみえてくる小学校の卒業写真は宝であるので、我が家だけのものにせず、地域、社会でその宝を共有しましょうと中村先生はおっしゃっていましたが、わたしも同感で、埃をかぶった宝が身近にないか探してみようと思いました。

(文責:児玉倫子)

新刊書の紹介



転換期を生きる 中国都市家族の育児と女性たち

鄭 楊 著

A5判、並製本、274頁

3,300円+税

ISBN978-4-909933-11-9 C3036



ヘルス・メディカル・ツーリズム研究 —高付加価値化による地域活性化—

辻本 千春 著

A5判、並製本、214頁

3,000円+税

ISBN978-4-909933-13-3 C3034



企業研究者が学生に語る 研究アイディアの見つけ方から事業化への道まで

酒井俊彦 著

大阪府立大学・大阪市立大学博士課程教育リーディングプログラム
「システム発想型物質科学リーダー養成学位プログラム」編

A5判、並製本、138頁 1,200円+税

ISBN978-4-909933-14-0 C3037

改訂版 化粧品業界のブランド戦略 —日本と韓国における化粧品会社の戦略比較—

赤松 裕二 著

A5判、上製本、216頁

3,000円+税

ISBN978-4-909933-12-6 C3063



大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加によって成り立っているNPO法人です。本会は、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社が採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、次のような事業を行っています。

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内
N P O 法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)
事務局
電話: 072-251-6533 ファクシミリ: 072-254-9539
e-mail: omup@hs.osakafu-u.ac.jp
URL: <http://www.omup.jp/>
入会金: 一口一円(終身会費)
振込先: 三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通
3976510

編集後記

世界中に感染が拡大した新型コロナウィルスは私たちの日常にまで大きく影響を与えていました。オンラインでの授業を進めるにあたり自著の教科書があつたらよかったですと感じる先生がいらっしゃるとも聞きました。新型コロナウィルス拡散防止を想定した「新しい生活様式」に必要なニーズがあるのなら、是非お役に立てるよう考えていただきたいと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。(文責:児玉倫子)